（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　中澤　光平

中澤光平氏の論文「淡路方言の記述と系統」は、兵庫県淡路島の方言に見られるアクセントや音韻を中心とする特徴を記述し、そこから同方言の系統上の所属を論じたものである。淡路島においては、北部で京阪神と共通する特徴、南部で徳島県と共通する特徴があることはつとに知られており、地元の研究者による記述も出版されているが、音響的計測や他方言との比較など、全島にわたる専門的な調査や研究はいまだなされていなかった。

中澤氏は第 1 章で調査方法と調査の概要を述べ、第 2 章で先行研究を概観した後、第 3 章において淡路方言の音素体系と音声実現、第 4 章で活用と音韻形態論を説明し、続く第 5 章で島内 14 地点のアクセントを詳細に記述した。淡路方言が京阪式のアクセント体系を持つことは知られていたが、その中でも古い特徴を保持していることを同章で指摘した。第 6 章、7 章ではそれぞれ助詞を中心とする文法と固有の語彙の地理的分布を記述した。方言形の地理的分布から歴史的変化の再構成を目指す言語地理学は、ドイツやフランスで発達して本邦でも『蝸牛考』『日本言語地図』などの成果を見たが、第 8 章では淡路島各地点の語彙とアクセントに基づいて島内諸地点の言語地理学的分析を行った。

詳しい地点記述から成る第二部では、淡路市北淡、洲本市由良、南あわじ市沼島という北部、中部、南部の３地点を対象として、9 章で北淡の重起伏アクセント、10 章で由良における「塩（ッショ）」のような語頭の促音、11 章で沼島における「～ジャッタ」などの二アクセント単位形という、いずれも日本語方言において珍しい現象を詳述した。

本論文の総括となる第三部では、淡路方言の下位区分と日本語方言における位置づけを論じた。淡路島には従来、北部、中部、南部という３つの方言区分が提唱されてきた。言語地理学的に検討した結果、洲本市を中心とするいわゆる中部方言は、北部方言と南部方言の諸特徴の移行的地域であることが確認されたが、同地域を特徴づける共通の言語的改新が見られないことから、系統上は淡路方言は南北二区分から成るという結論に至った。また地理的分布を考慮に入れて通時的変化を再構成した結果、北部と中南部が最初に分化したことが示された。アクセントから他方言と比較したところ、淡路方言は和歌山県や徳島県など中央式アクセントの周縁部と類似する一方で、「油」「いとこ」など金田一語類の３拍 5 類名詞にアクセント型の特異な分裂をもつことを指摘した。

本論文は、淡路方言を特徴づけている助詞ガとハの合流などの文法面においてなおも考察の余地を残しているものの、自身で 6 年間 30 次にわたって収集した一次資料に基づいて淡路方言の全体像を捉えようとした労作であり、また言語地理学やアクセント論を活用した通時的研究という点で独創的な貢献がなされている。淡路島を中心としつつも、瀬戸内海沿岸を始めとする全国の方言を対象とした、広い視野による方言研究である。以上の理由から、博士（文学）の学位に値すると判断する。